

岡崎城総構え発掘調査（中央緑道）

現地説明会資料

平成 29 年(2017)10 月 28 日（土）

調査主体：岡崎市教育委員会／支援業者：(株)知立造園

1 調査の目的

今回の調査は、「岡崎城跡整備基本計画-平成 28 年度改訂版-」（平成 29 年 3 月）と「乙川リバーフロント地区整備計画」に基づき、今後整備が行われる中央緑道及び豊川信用金庫跡地について、岡崎城総構えの総堀や桜馬場などの遺構を確認し、歴史まちづくりとしての整備に活かすことを目的としている。

2 調査期間

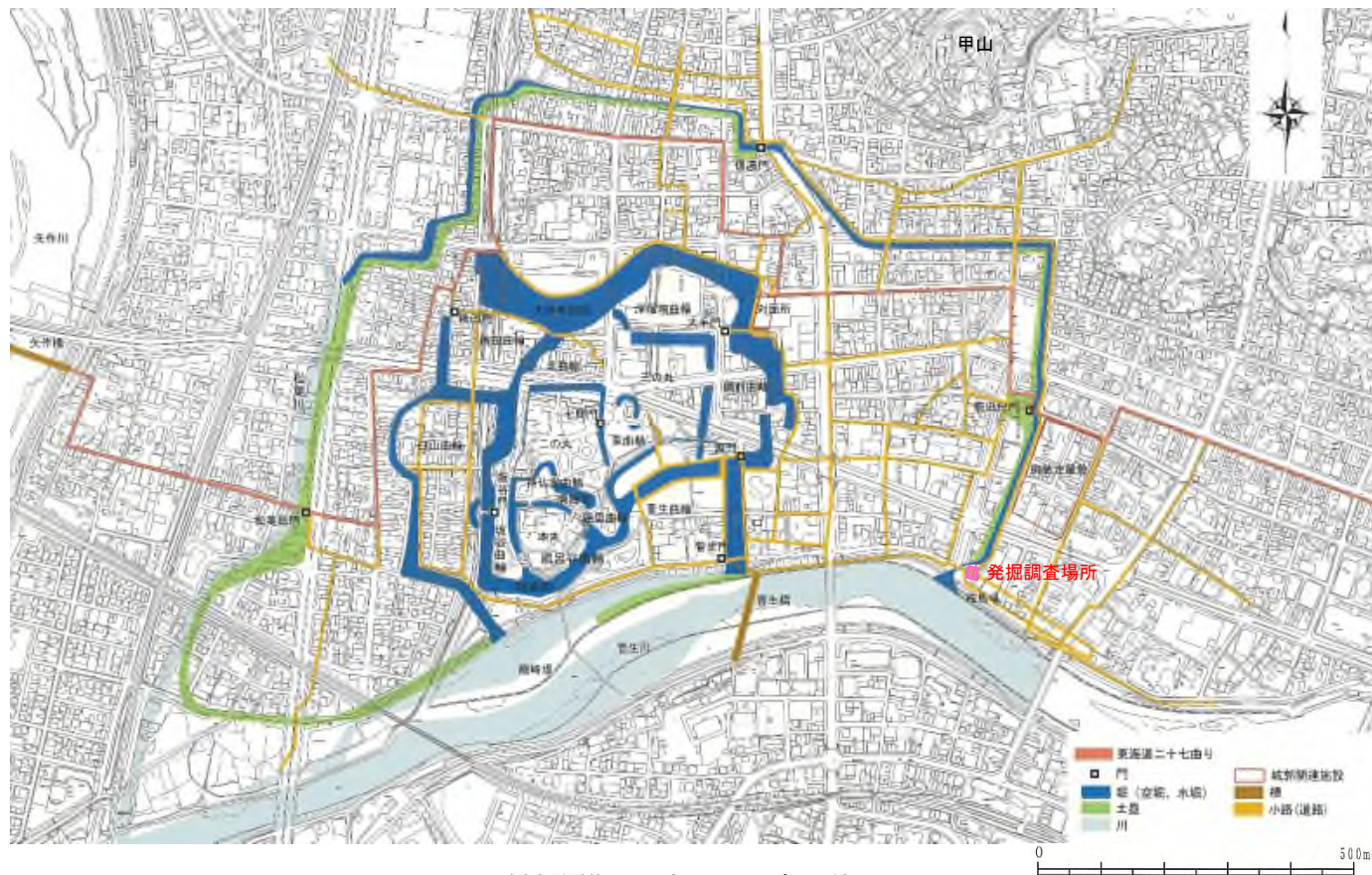
平成 29 年 10 月 3 日（火）～11 月 10 日（金）予定

3 岡崎城の概要

【中世の岡崎城】岡崎城は、享徳元年(1452)～康正元年(1455)頃に、明大寺に居館を構えた西郷弾正左衛門頼嗣（頼頼）により、菅生川北岸の甲山から南西に延びる丘陵先端の龍頭山に築かれた砦に始まるとされる。享禄 4 年(1531)には松平清康が菅生川の北へ居館も移し整備した。天文 11 年(1542)に岡崎城で誕生した徳川家康は、桶狭間の戦い後、永禄 3 年(1560)～元亀元年(1570)まで居城し城郭整備を行った。

【総構えの構築と東海道の整備】天正 18 年(1590)豊臣秀吉により家康が関東移封になると、岡崎城は豊臣重臣の田中吉政が城主となり、慶長 6 年(1601)までに城下町を造成し、堀と土塁で囲う総構えとした。また、菅生川の南を通っていた東海道を城下に引き入れた。これにより、岡崎城は東西約 1.5km、南北約 1km の大城郭となり、近世の城郭の基礎がつくられた。

江戸時代には、徳川家の信頼あついで譜代大名が岡崎城主となった。慶長 6 年には本多康重が入城し、伝馬制が制定されことにより、城郭の東側に東海道沿いに伝馬町等を新設し街道筋を整備した。3 代忠利は寛政年間～正保元年(1624～44)に菅生川端石垣と籠崎堤を築造した。正保 2 年(1645)に水野忠善が城主となると、城東の唐沢町、六地藏町などの町家は郭外の川沿いに移転となり、郭内は東海道沿いを除き社寺と武家屋敷地になった。総構えの東に接し整備された武士の馬術訓練に使われた桜馬場は、船荷を下す土場（渡場）としても利用され、六地藏町と伝馬町が川荷の運送を特権的に担っていた。



岡崎城総構えと今回の調査区位置図

【岡崎城総構え調査地点周辺の変遷】



①岡崎城図 江戸時代前半

前本多時代の総堀には水が通っておらず空堀であり、内側に土塁が造られている。



②参陽岡崎府内図 江戸時代中期 明和 8 年(1771)写

水野時代に総堀は水堀となり、川に沿い馬場が整備される。左右に桜並木があり桜馬場と呼ばれた。



③岡崎城図 寛政 12 年(1800)～文化 2 年(1805)

桜馬場に土場が描かれる。六地藏町が陸路の運送を担い、北は東海道に通じ材木等が運ばれた。



④額田郡岡崎地籍図 明治 17 年(1885)重合せ図

総堀全体が青色で描かれ、当時の堀幅も書かれる。堤防沿いには道路が整備されている。



⑤岡崎市市街地図 昭和 2～5 年(1927～30)

籠田総門北の総堀は埋没していたが、南側は昭和 20 年代まで残り、水路、貯木場に利用された。



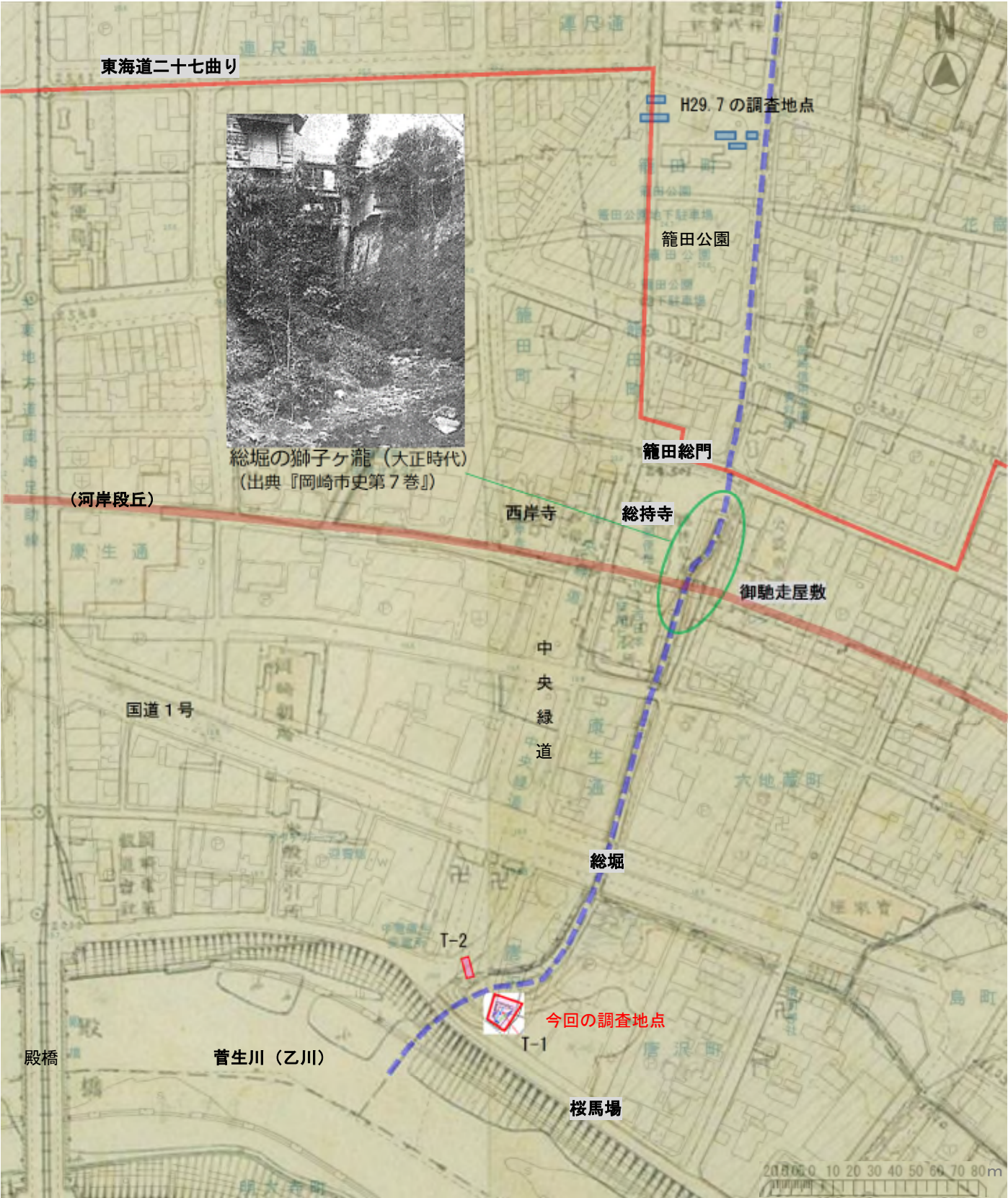
⑥岡崎市市街地図 昭和 33 年(1958)

戦災復興の区画整理事業で総堀は埋め立てられたが、河川敷に総堀の形の名残が見られる。

(①～③, ⑤：岡崎市美術博物館蔵、④：愛知県公文書館蔵「地籍図 額田郡 岡崎市街」 各図の部分に加筆)

【発掘調査の概要】

今回の調査地点は、近世の初頭に岡崎城跡の最外周に掘られた総堀の東側の南端部分であり、また、総堀が菅生川に注ぎ込む合流点にあたる。現在の都市計画図と昭和初期の地図とを重ね合わせ、総堀の肩の位置と想定される場所を各調査区とした。



調査区の配置図（昭和2～5年岡崎市市街地図の重ね合わせ図）

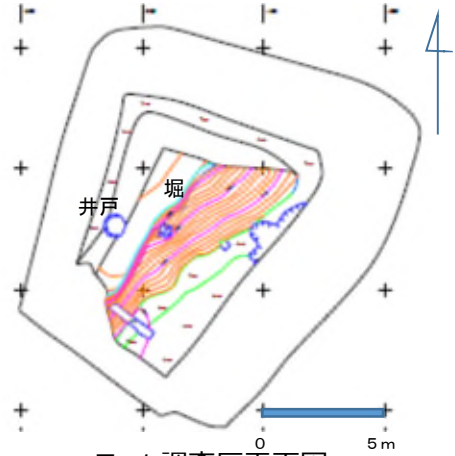
（名称が網掛けの施設等は埋没・移転している。）

■T-1:堀の東側（豊川信用金庫跡地）



T-1 近代の堀跡（北西から）

T-1は、総堀の東側の肩を確認することを目的に設定した。これまでの調査では、江戸時代の総堀そのままの遺構は確認されていないが、明治時代以降に総堀の筋を踏襲し利用されていたと考えられる堀跡が確認された。この堀は、外側（東側）の肩の部分になり、地表から深さ3.4mまで掘り下げたが、さらに堀底は下へと続く。戦後の復興期に埋め立てた土の中からは、戦災時の焼土や大量の花崗岩の破片と近世から近代の瓦、陶磁器が出土している。堀の法面上では、方形のえぐりが入る用途不明の花崗岩が出土した。また、堀を埋め立てた後に掘られた現代の井戸が確認された。



T-1 調査区平面図

■T-2:堀の埋め立て土（中央緑道南側）



T-2 現代の石組溝と花崗岩片の埋め立て土（北西から）

T-2は、総堀の西側の肩を確認することを目的とした調査区である。地表から2mの深さまで掘削したが、こちらの調査区でも地表下1.6mで戦後に埋め立てられた大量の花崗岩の破片を含む土が全面で確認された。このことから、総堀の肩はさらに下層または西側にあると推定される。花崗岩片の土層からは、間知石積みの現代の石組溝が確認されている。